

## 死にざまこそ人生～「ありがとう」と言って逝くための10のヒント

(平成24年5月9日 柏木哲夫先生)

「人は生きてきたように死んでいく。『生』の延長線上に『死』があるのではなく、日々『死』を背負って生きている」・・・柏木先生はホスピスの現場で約2,500名の患者を看取られた経験を通し、そう実感されたとのことでした。

仕事優先で家族を省みず生きてきた男性患者が、二人の娘が一切見舞いに来ないことで「自分の人生は何だったのか」という「魂の痛み」に突き当たる。「何とか娘たちに謝って死を迎えたい」という患者の切なる最後の希望が柏木先生の仲介で叶えられ、この男性は魂に平安をもって旅立たれたということです。一方、ある肺がんの男性患者は、いさかいにより長年家出したままの息子に対し「最後に会って息子に謝らせて死にたい」と望み、息子は「あんな親父の死に目になど会いたくない」と言います。そして和解することなく、切なく辛い看取りとなったということです。この対比から、人生の総決算の場における「和解」のもつ意味の重さについて深く考えさせられました。

また、「人間には『ユーモア』が遺伝的に組み込まれていると信じる」と話されます。人が辛い悲しみにあるとき、「ユーモア」が、その辛さ・悲しさを少し引き離す役割を果たすことを患者との会話の事例を交え示されました。心の奥底から生み出される「ユーモア」は、人の辛さを取り除く大きなパワーを持っているのだ、と。柏木先生のお話は、ホスピスの現場での事例を交えたものでしたが、決して私たち聴講者に、暗く重苦しいというイメージだけを与えることはありませんでした。それはまさに、終始ユーモアが散りばめられた柏木先生のお話ぶりによるものだと「ユーモア」の力に納得させられました。



柏木先生の著書です。

『死にざま』こそ人生  
『ありがとう』と言って逝くための10のヒント」朝日新書

## スピリチュアリティ考～癒しをもとめて (平成 24 年 5 月 16 日 窪寺俊之先生)

窪寺先生は、講演に先立ち、ご自身のグリーフ体験について語られました。阪神・淡路大震災を経験された先生は、3.11 東日本大震災を東京で体験され、「今、自分は震源地にいるのではないか。」と思うほどの感覚で、阪神・路大震災の時の記憶・恐怖感が一気によみがえり、このまま下敷きになってしまうのではないかと思ったほどだったそうです。

その後、さまざまな被害の報道を目にされ、「なぜこんなにつらい目に遭わなければならないのか。被害に遭われた方々がどうしたら立ち直れるのか。日本に住む全ての人々がグリーフを体験しているのではないか。」との思いに至ったそうです。「百年に一度の大惨事に見舞われているのだから、ここから多くを学ばなければならない。」「3.11 を生き方を変える出発点としたい。」をおっしゃったのが印象的でした。



命について考えさせられるエピソードを  
穏やかな語り口で話されていました。

「スピリチュアリティに則って命について考えてみると、いわゆる動植物だけでなく、あらゆる存在や出来事に新しい意味を見つけ出すことができるようになる。そうすれば、自分の命についても特別の意味・使命を見つけ出す助けになる。」とおっしゃいました。

ホスピス病棟という臨床の世界で実践されてきた先生の話は、これまでスピリチュアリティについてさほど意識したことのなかった私にも深く染み込んできました。

演題：あまりにも弱いいのちを生きて～ALS患者のまなざし  
(平成24年7月4日 西村隆先生)

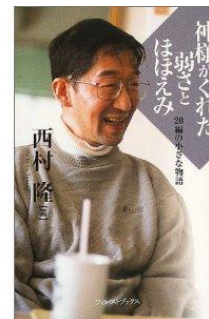
今回は、西村先生がALS（筋萎縮性側索硬化症）という難病にかかって「他者絶対依存」という状況になりながらも、その状況を受け入れ、その中に明るさや豊かさを見出す姿勢と、先生の人柄をよく理解し、素晴らしい距離感で支えている奥様（言葉を発せられない西村先生の代わりに話されていました）の優しさとの相まって、時に笑いがあり、時にふと考えさせられる、ユーモアあふれる楽しく温かな講演でした。

ALSは治療法が確立されていない進行性神経難病で、進行すれば、身体の自由が奪われていき、自力では呼吸ができなくなり、最後は死に至る病気です。10万人に3人の割合で発生する病気で、我が国では9,000人もの方がこの病気に罹っているということをこの講演で初めて知りました。

西村先生が話されていたことで印象に残っているのは、そういった難病であるALSに罹った西村先生に対してのご友人や奥様の接し方の話です。ご友人から「西村は今まで一生分しゃべったんやから、これからは聞き役でええやん。」と屈託無く言われて、かえって気持ちが明るくなったというお話。奥様も普段の生活の中では、時には厳しく指摘したりもするという、ごく普通の接し方をされるので、そのことで助けられているというお話。

いずれも、「難病に罹ったからといって、悲しみにくれているだけじゃない。言葉は発せられなくても、心の中ではいっぱいおしゃべりもしている、同じ人間だ。」ということが根底にあり、そのことで、自らの尊厳を認められていると感じることができ、西村先生も明るく前向きになれるのだろう、と思いました。

生きていれば、いつ何時、健康や身体の機能を失うことになるかもしれません。その時に、どう向き合うのがいいのか、どうすれば前向きにとらえることができるのか。もちろん、状況によっては前向きに考えることが難しいこともあるでしょうが、普段から家族や周囲の人と語り合ったりして「命」や「人生」について思いを巡らしたいと考えさせられる、明るくも味わい深い講演でした。



西村先生の著書です。

「神様がくれた弱さとはほほえみ 20編の小さな物語」  
いのちのことは社フォレスト  
トックス